

## 2 柳原三佳の『ジャーナリスト Eye』

# 自分が変われば地域が変わる 地域が変われば医療が変わる

**実**は私、つい数年前まで医療不信のどん底で苦しんでいました。心の中には、「病院は信用できない」「1分間診療でなにがわかるの?」「もしミスが起こっても隠されてしまう」そんなマイナスイメージばかりがはびこっていました。なぜ、こんな気持ちを抱いていたのか……。実は、親子二代で医療過誤の被害に遭うという辛い経験をしたからです。

1993年、私の実父(当時62歳)は喉の痛みを訴え、関西にある県立病院の耳鼻科に通院していました。ところが通院から7日目の朝、大量に吐血。出血性胃潰瘍と診断され、救命救急センターで胃や小腸を切り取る緊急手術を受けましたが、そのまま回復することなく、亡くなったのです。考えられる原因は、過剰に投与されたステロイドなどの副作用。しかし、病院からは何の説明もありませんでした。

私たちは悩んだ末、民事裁

判を起こしました。医療過誤訴訟は大変な労力と時間を要するものでしたが、父の死から6年後、原告側の主張は認められ、高裁で逆転勝訴することができたのです。

ところが、父の裁判を闘っているとき、もうひとつの医療過誤事件が忍び寄っていました。なんと、今度は私のお腹の中に、手術時のガーゼが置き忘れられたのです。発見される直前の3年くらいは、腹痛などの体調不良が続いたため、何度も病院に行きましたが、毎回、原因不明のまま帰されていました。しかし10年後の2005年、ついに残留ガーゼ発見。私はすぐに再手術を余儀なくされたのです。

ガーゼの除去手術が終わって2か月後、私と夫は加害病院である千葉県立東金病院の院長と面談することとなりました。会議室に通され、しばらくすると、院長が現れました。そして、私たちの姿を確認するなり、「いやあ、このた

びは大変申し訳ありませんでした」と、深々と頭を下げられたのです。

**緊**張していた私たちは一瞬、「えっ」という感じで、拍子抜けしてしまいました。院長は、過去に起こった医療事故の話も出しながら、再発防止のためにどのような取り組みをしているかを熱っぽく語り始めました。そして今、この地域の病院が、医療崩壊の危機に瀕しているという深刻な話もされたのです。

それが、地域医療再生で著名な平井愛山先生との出会いでした。今思えば、このときの東金病院は、まさに医師の研修制度改変のあおりを受け、内科医が12人から2人に激減していきまっただ中。私は、院長自らが休む間もなく、夜の11時まで外来患者の診察に当たっているという過酷な現状を初めて知り、大きな衝撃を受けたのです。そんなことも知らず、我々地域住民は、ただ一方的に医療に対

## 柳原三佳(やなぎはら・みか)

実父を医療過誤で亡くし、自身も医療過誤被害に遭いながら、現在はNPO法人地域医療を育てる会の会員としても活動を行う。著書に『交通事故被害者は二度泣かされる』『死因究明～葬られた真実』『自動車保険の落とし穴』など多数



NPO法人地域医療を育てる会が主催した平井院長の還暦祝い(2009年9月撮影/中央:千葉県立東金病院・平井愛山院長 右:地域医療を育てる会・理事長・藤本晴枝氏、左:柳原三佳)

してさまざまな要望を募らせるだけでした。診察まで長い時間待たされるのには、こんな理由があったなんて、誰が気づいていたでしょうか。

医療者の疲弊はミスを生み、最終的にはその地域から医療が消えることにつながりかねません。ふと気づくと、医療不信で悶々としていた苦しい気持ちは、いつの間にか過去のものとなっていました。そしていつか、院長先生はじめ地域医療に携わる人々のことをもっと応援していかなければならない、という気持ちに変わっている自分に気がついたのでした。

一方通行のままでは、お互いに歩み寄ることができませ

ん。特に、私のような体験をすると、病院への信頼を取り戻すことはなかなか難しいものです。でも、双方が歩み寄り、語り合うことで、その壁を突破し、逆に信頼関係を築くこともできるのだということ、私はこの数年で実感しました。

**現**在「NPO法人地域医療を育てる会」に参加し、「自分が変われば地域が変わる。地域が変われば医療が変わる」を合言葉に、活動しています。最近では、平井院長とともに講演をさせていただくこともあります。きっかけはともかく、人との出会いとは本当に不思議なものだと感謝する今日この頃です。